

観光地の磨き上げ

■コロナ禍後の人の流れ

今年の5月以降、コロナ禍にがまんを強いられていた多くの人たちが積極的に出かけるようになっていきました。市内を見ても、鳥海山や元滝、仁賀保高原、ねむの丘周辺などの入込客数はいずれもコロナ禍前と同じか、それ以上となつていいます。また、観光とはちよつとちがいますが、金浦竹嶋瀉周辺の公園、エスパークやスケートパークといった新たなスポーツ施設の利用などでの来訪者も増えていきます。あわせて、今年の夏のイベント、「夢の祭典in潮風」や「にかほ市花火大会」の来場者数も以前の1.5倍からの入込客となり、ここでも多くの人がにかほ市に来てくれることがわかります。

■「も」という考え方

デービッド・アトキンソン氏は、著書「新観光立国」の中で、「観光立国になるためには『も』が必要である」と述べています。現在、日本で会社を経営するイギリス出身のアトキンソン氏は、日本政府の観光に関する専門家会議のメンバーでもあり、特に、日本の観光・文化財・経済政策に深い知識をもつエキスパートとして活躍している人です。

同氏は、この本の中で、「日本の場合、どれか一つの強みを打ち出せば観光客がわっと押し寄せるといふ幻想を抱いているが、仮にその強みがヒットして観光客に受け入れられたとしても、それは一回行けば十分なものにならず、確かな

観光立国となるためのリピーターの獲得にはつながらない」と指摘しています。そのうえで、ひらがなの『も』への意識が大切だとして、「気候も」「自然も」「文化も」「食事も」、すべてのモノがうまく組み合わさっていることが重要であると述べています。

■あの手この手

にかほ市に暮らす私たちは、「にかほ市は、海もあり、山もあり、美味しい食べ物もあり、気候も温暖で暮らしやすい良いところだ」とよく言います。私もそう思います。ただ、このときに考えなければならぬのは、私たちの感じているものが相手に理解してもらえぬものになっているかということです。

言ってしまうえば、日本全国どこにでも美しい海や山はあります。そんな中で、にかほ市を多くの人に観光地として認めてもらうには、あの手この手を使って「にかほ市はすてきな」と思ってもらわなければなりません。つまり、ポイントは自分たちが素晴らしいと思えるものを「あの手この手」になるように上手に商品化することができるとかなのだと思います。

■新たな取組み

いま、市内のいくつかの観光事業者が、「星空」を使った新たな旅行商品づくりを行っています。中には、満天の星空に抱かれた仁賀保高原でディナーをとった

あと、星の案内人が約60分にわたり星空を解説してくれるという旅行商品もあります。たいへん好評のようです。

また、若手漁師による取組みとして漁業体験事業も行われています。そもそもは担い手育成を目的とした事業ですが、そこに観光的要素を入れながら旅行商品としての価値も付け加えられています。

さらに、現在道の駅象瀉「ねむの丘」の横に建設中のアウトドア拠点施設は、たとえば鳥海山に来た登山客、観光客を市内に誘導する役割を担うことも目的の一つとしています。鳥海山の登山客に別のアクティビティ体験を提供できるようになれば、それまで日帰り客だった人たちを新たな宿泊客として迎え入れることができるようになるはずで

この他にも市内には、新たな取組みをはじめた人たち、さらなる挑戦をしようとする人たちが増えてきています。まだまだやれることはたくさんあると思います。それぞれの分野を、それぞれのプレーヤーが磨き上げ、『も』としてお互いがつながり合うことで、観光地としての魅力が加速度的に成長していくのだと私は思います。



にかほ市長
市川雄次

創造を

想像する

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧いただけます。

